8 月 14 日のメッセージ

聖書：ヘブライ人への手紙　12：　3－13

「鍛錬」

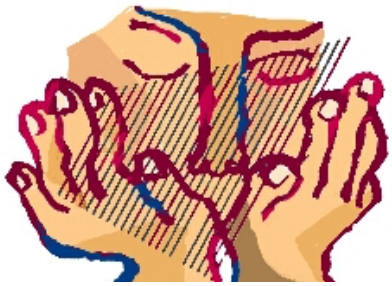
「互いに配慮しながら生きること」。それが平和への道であることはよく知っています。しかし、現実はどうでしょう。「互いに」と言われながら、一方的に配慮し続けている、配慮させられ続けているばかりです。忖度し、相手の顔色を窺い、自分を殺して生きています。配慮すればするほど損したように思えてきます。かと思えば、「よかれと思って」相手の嫌がることばかりをしてしまうことも多いものです。相手のことを見ず、一方的に自分の思いを押しつけてしまっています。なまじ、「自分は配慮できている」と思っているので、「相手から見返りがない」と損したように思ってしまいます。

しかし、平和への道とは、そのような一方的なものではありません。隣人と共に形作っていくものです。なぜなら、神が私たちに求めておられるのは、自己満足ではないからです。まず神に聞き、神の思いに応えていくことがまず求められています(「……主があなたに求めておられることは何か。ただ、……主を愛し、心を尽くし、魂を尽くしてあなたの神、主に仕え、……あなたが幸いを得ることではないか。」申命記 10:12-13)。この世界に暮らす全ての者が神の方を向いているなら、そのように生きることも楽なことでしょう。だが、現実はやはり厳しいと言わざるをえません。その中で神の思いに応えていくことは、多くの労苦を伴うでしょう。それに加えて、「互いに配慮しながら生きる」ことは、一方的な配慮を繰り返すことよりも遙かに厳しい道だと言えます。

しかし、聖書はその労苦を「鍛錬」と呼ぶのです。その瞬間には徒労としか思えない労苦こそが、後に平和の実を結ぶのだ、と(「およそ鍛錬というものは、当座は喜ばしいものではなく、悲しいものと思われるのですが、後になるとそれで鍛え上げられた人々に、義という平和に満ちた実を結ばせるのです。」ヘブライ人への手紙 12:11)。そのために神は、私たちを躓かせるものを取り除くと約束しておられます(「わたしを信じるこれらの小さな者の一人をつまずかせる者は、大きな石臼を首に懸けられて、海に投げ込まれてしまう方がはるかによい。」マルコによる福音書 9:42)。たとえ現実には起こりえないと思っていたとしても、神の約束は確実です。私たちの思いも及ばないときに、神の約束は実現します。自分勝手に、自分のためだけに生きることが正しいと思わされているこの社会に、必ず神の正義を実現されます(「正しい裁きは再び確立し／心のまっすぐな人は皆、それに従うでしょう。」詩編 94:15)。他者のために、他者を思いながら「互いに配慮し合う」時を備えてくださいます。

だから、諦めてはなりません。神は私たちを鍛え、神と共に平和を実現する者へと造り替えてくださるのです(「わが子よ、主の鍛錬を軽んじてはいけない。主から懲らしめられても、／力を落としてはいけない。なぜなら、主は愛する者を鍛え、／子として受け入れる者を皆、／鞭打たれるからである。」ヘブライ人への手紙 12:5-6)。

ただし、「全ては神の鍛錬だから」と何でも丸呑みにするのは正しくありません。何が正しくて、何が間違っているのか、神に聞き、神の思いを心に宿すことが大切です(「塩は良いものである。……自分自身の内に塩を持ちなさい。そして、互いに平和に過ごしなさい。」マルコによる福音書 9:50)。また、耐えられないような労苦を味わわせることはないと約束されていることも忘れてはなりません(「あなたがたを襲った試練で、人間として耐えられないようなものはなかったはずです。……」コリントの信徒への手紙一 10:13)。



神の思いに応えるべく、「互いに配慮し合って生きる」道を、その労苦を選んでいきたいと願います。神の鍛錬によって、ますます豊かな私たちとなって参りましょう。